熊本大学教育学部紀要，人文科学
第61号，153－162，2012

病院ボランティアによる入院児の支援に関する考察

－小児医療における病院ボランティアの活動報告の分析をとおして－

藤 原 志 帆

Assistance to Inpatient Children by Hospital Volunteers:

Analysis of Activity Reports on Hospital Volunteers in Pediatric Care

Siho FUJIHARA

(Received October 1, 2012)

This paper clarifies the characteristics of assistance to inpatient children by hospital volunteers, on the basis of analysis of 17 activity reports on hospital volunteers in pediatric care. From the analysis, it has become apparent that hospital volunteers understand the constraints of guardians and professionals, and therefore, they provide a diverse range of assistance not only to inpatient children, but also their families. This includes playing with them, attending to them, and providing them with entertainment. Through these activities, volunteers play a unique role in creating a sense of joy, relief and normality during the course of the patient's treatment; basically providing them with social support.

Key words : inpatient children,hospital volunteer

はじめに

病弱教育における各教科の指導は，小・中学校などに準ずるが，児童・生徒の障害の状態や特性などを十分考慮し，「指導内容の精選」，「自立活動の時間における指導との関連」，「体験的な活動における指導方法の工夫」，「補助用具や補助的手段，コンピュータ等の活用」，「負担過重とならない学習活動」に配慮して行うものであるとされている[1]．このうち，「体験的な活動における指導方法の工夫」は，2009年3月に告示された特別支援学校の学習指導要領で新たに加えられたものである．

土屋・武田（2011）は，「体験的な活動」を伴う学習について，病院内教育では制約が非常に厳しくなることを指摘し，病院内教育における「体験的な活動」を伴う学習の実施状況を調査している．この調査の報告では，「体験的な活動」を伴う学習の実施に関して制限となる要因と各学校が行っている対策がいくつか挙げられている．その対策の一つに，「病院や学部の施設や人材の活用」がある．「病院内のボランティアから音楽，創作活動等を教わり，心の安定が向上し，学習課題の発見等もできた」などの実施例を挙げ，病院内の施設や人材を地域の教育資源として活用することで，体験的な学習の活動範囲や学習内容を広げられることが示唆されたと述べている[2]．

筆者は，病院内教育における「体験的な活動」の充実について地域資源の活用を検討するために，病院ボランティアの活動に着目した．

病院内教育への病院ボランティアの導入については，「院内学級に多様な楽しさを拓く」，「多様な人々の交流」，「多様な表現の力をつける」，「心に寄り添う」などをとおして「子どもが輝ける場所をつくる」ことができる点で意義があるとされている[3]が，病院内教育における病院ボランティアとの連携の実態を報告した研究はみられない．

小児医療における病院ボランティアの活動自体についてみても，その全体像を把握できる研究は極めて少ない．

米山ほか(2012)は，2009年7月から2010年3月に，小児がんの子どもが入院する総合病院・小児専門病院204のボランティア統轄者を対象に，小児医療におけるボランティアの実態について郵送質問紙調査を行っている[4]．また，伊藤（2007）は，2007年9月から11月に，全国20の研究協力が得られた病院における入院児の付き添い家族485名を対象に，入院環境が付き添い家族の満足度に与える影響などについて郵送質問紙調者を行っている[5]．岡・鶴澤（2005）は，2004年2月に，小児がん白血病研究グループに参加している国内の41施設を対象に，国内小児がん治療施設に

おける教育と保育の実態について，メール質問紙調査を行っている[6]．しかしこれらの調査研究には，病院ボランティア活動の内容の詳細が把握できるものはない．

病院ボランティアの活動内容について，その全体像に言及した研究は，松尾・原（2004）のみである．1961年から2003年までのPubMedと医学中央雑誌から，小児医療におけるボランティアに関わる文献を抽出し，小児医療の分野において，ボランティアが子どもと家族の入院生活にどのような影響を与えているかを検討している[7]．ボランティア活動の内容について，その概要がいくつか挙げられているが，2004年以降の活動や詳細について把握することはできない．

そこで本稿では，小児医療における病院ボランティアの活動報告を分析し，活動の全国的な実態を把握した上で，病院ボランティアによる入院児の支援がどのように行われてきたのかを考察することとした．

I. 分析の対象および方法

国立情報学研究所のデータベース「CiNii Articles」を用いて，「病院」「小児」「ボランティア」の3つの検索語により，小児医療における病院ボランティアの活動に関わるとみられる文献38件を抽出した．次に，これらを閲覧し，重複して挙げられた文献，小児医療（外来は除く）における病院ボランティアの活動に関わらない文献を除外した．その結果残った22件のうち，さらに調査報告（5件）を除き，17件の活動（事例）報告[8]を本稿の分析の対象とした．

分析の方法は以下のとおりである．まず，上記17件の文献に掲載された活動を，「活動の実施者」，「活動の対象者」，「活動の内容」について整理する．次に，対象者の言動が紹介されている8件の文献に焦点を当て，「活動の成果」について分析する．

II. 小児医療における病院ボランティア活動の実態

1. 活動の概要

17件の文献に掲載された小児医療におけるボランティア活動について，実施者，対象者，活動内容の別に表1・2に整理した．

活動の実施者の内訳は，一般が14件，大学生が13件，高校生が2件であった．一般には，病院外の専門家（熱気球グループ，動物介在活動グループ，ケアクラウン協会，美術関係者など）も含まれている．大学生には，医学関係が4件，看護関係が3件，福祉関係が3件，保育関係が1件，教育関係が1件，その他が2件含まれている．

ボランティア活動の対象者は，入院児が15件，家族が11件であった．

ボランティア活動の内容は，「遊び」（ゲーム・おもちゃなど）が17件，「季節の行事」（夏祭り・クリスマス会など）が16件，「絵画・造形活動」（お絵かき・折り紙など）が15件，「付き添い」（寝かしつけ，話し相手など）が12件，「鑑賞会」（コンサート，道化師ショーなど）が11件，「音楽活動」が9件，「読み聞かせ」・「院内装飾」・「院内作業」が7件，「スポーツ」が5件，「野外活動」・「バザー」が3件，「学習支援」・「ワークショップ」・「動物介在活動」が2件，「その他」が7件であった．「その他」には，科学実験，院内カフェ，英会話，料理，院内社会見学，相談，夢をかなえる活動が含まれている．

2. 活動の成果

ここでは，活動における対象者の言動が特定できる文献8件に焦点を当て，小児医療における病院ボランティア活動の成果を分析する．以下，分析の対象となった文献からの引用については，文献番号とページ数を引用の後ろに括弧書きで示す．

1）京都大学附属病院小児科ボランティアグループ「にこにこトマト」（文献1・3）

京都大学附属病院小児科では，「にこにこトマト」が，「入院している子どもとその付添家族に『楽しく豊かな時間』を」（③p.41.）提供することを目的として，読み聞かせ，工作などの21種類の定期プログラム，ハロウィーンパーティ，夏祭りなどの不定期プログラムを用意している．子どもたちは，病室に貼ってある「にこトマカレンダー」をチェックし，関心のあるプログラムに参加する．

報告には，「学齢期以下の子どもたちは院内保育がないので，壁の予定表（カレンダー）を毎朝チェックし，リハビリやお風呂の時間にかからないように，と生活の目安にして」（③p.50.）おり，「医療者は本活動を，『子どもの生活の一部だ』と表現する．」（③p.50）と子どもたちの様子や医療者のコメントが紹介されている．

また，活動に参加していた6歳の女児の様子が以下のように紹介されている．「あるとき，相当重篤な病状の子どもが音楽の時間に父親と一緒にやってきた．……すべての活動に参加したい『にこトマいのち』の子どもだったが，そのときは，もう座っている力も残されておらず辛そうな表情だった．……ところが，顔には表情のないその子の足が，音楽に合わせてリズムを取っているのだ！そもそも辛い状態でも望んで参加したのだから，寝ころんだままでも楽しめたのであろ

う．顔には笑顔はなくても，『心が笑顔』だったのかもしれない．」（③p.51.）

また，活動に参加した母親から，「子どもがにこトマで楽しんでいる姿を見ていると，親同士の会話も，自然と子どもが遊ぶ様子や子どもがつくったものに対するコメントになったりします．病気のことばかりを考える毎日のなかで，病気以外のことを話題にできることは，とてもうれしいことなんです．」「同じ病気の子どもをもつ親御さんと知り合い，情報交換できることも心強いです．」（①p.79.）というコメントが寄せられている．

上述の報告からは，入院児が，遊びの楽しさによって療養生活に見通しをもち，またそれを見守る保護者も療養生活に前向きな姿勢をもてた様子がうかがえる．

表1　小児医療における病院ボランティア活動の概要（その1）

文献	実施者	対象者	内　容
1	京都大学附属病院小児科ボランティアグループ「にこにこトマト」（一般）	入院児 家族	・定期プログラム21種（読み聞かせ,工作,英語でのゲーム，墨あそびなど），バザー（年2回），不定期プログラム（ハロウィーンパーティ，夏祭り，音楽会など）
2	北里大学「ぬいぐるみ病院部」（大学生）	入院児	Child Doctor Hospital（CDH）活動
3	京都大学附属病院小児科ボランティアグループ「にこにこトマト」（一般）	入院児 家族	・定例会（観望会，手芸・造形，おはなし，科学実験など），・にこトマ文庫，病棟内カフェ・バザー，季節の行事，コンサート，民族舞踊，古典芸能，特別なゲスト（ミッキーマウスや人形劇団），窓・天井の装飾
4	国立成育医療センターボランティアの会　シッティング「ひまわり」（一般）	家族	・遊び相手（折り紙・お絵かきなど），見守り ・センター内にて，月から金まで午後1時から4時（火曜日は午前11時から午後1時までも．）どちらかの時間帯で1時間半　各回10人
5	神奈川県立こども医療センター A:「オレンジクラブ」（一般・大学生・高校生），B: 県立保健福祉大学サークル「チャイルドウィッシュ」（大学生） C：「リラの家」（一般）	家族	・預かり（A：水曜10時半から16時，B：第2・4土曜と毎週日曜の午後，C：月・火・木・金の9時から15時）
6	長野県立こども病院ボランティア（一般：熱気球グループ，動物介在活動グループ，信州ケアクラウン協会，患者など）	入院児 家族	・病院祭のブース「熱気球に乗ってみよう!」（気球への試乗），「動物ふれあい広場にいらっしゃい!」（動物介在活動），「大道芸山の道化師パックマンと遊ぼう!」（ケアクラウン），「中庭のふれあい広場」（院内学級の子どもたちが家庭科の授業でつくったポケットティッシュケースを販売） ・病室訪問（定期：ケアクラウン）
7	「（財）がんの子供を守る会ソーシャルワーカー」（一般）	入院児	・遊びと学習のボランティアの派遣
8	山梨大学附属病院小児科ボランティア「サニースマイル」（大学生）	入院児 家族	・病棟での活動（週3回19時から21時，話し相手・遊び相手になっている．泣いている患児をあやして寝かしたり，患児たちのベッドの上に行ってゲームをしたり，絵本を読んだりしている．時にはプレイルームに集めて遊ぶ．），病棟主催のイベントの企画・参加，夏祭りとクリスマス会，農園（病院の南側の一角に農園を借りて，季節の花や野菜を育てる．入院中であっても季節の移り変わりを感じてもらうことや環境の美化が目的．），兄弟サポート（患児のご両親が兄弟を連れて来られたときに，面会中に兄弟の遊び相手となる．）
9	聖路加看護大学「ナイトフレンド」（大学生）	入院児 家族	・折り紙，お絵かき，ゲーム，絵本の読み聞かせ，学習，食事介助，寝かしつけ（平日夕方）

表2 小児医療における病院ボランティア活動の概要（その2）

文献	実施者	対象者	内　容
10	神奈川県立こども医療センター「オレンジクラブ」（一般・大学生・高校生）	入院児 家族	・子供のあそび相手（平日8～17時），シーツ交換（月2回,重症心身障害児病棟),きょうだいお預かり(週1回)，縫製（月2回，病棟から依頼される繕いや縫い物），作業（月1回，カルテ組みなど），手作り（月1回，バザーでの販売す品の作製），手芸（月1回，手芸品の作製），飾りつけ（月1回，アニメのキャラクターなどの絵を飾りつける），絵画（年4回,日本画をかけかえる），お話会（週1回），ドレミで遊ぼう（月1回），音楽療法（月1回），音楽活動（月2回），音楽演奏（年1回），フラワーアレンジメント（週1回，病院内に生け花を飾る），屋上庭園の草取り（月2回），フラダンス，パントマイム，英会話
11	小児病棟ボランティア(一般･高校生)	入院児	・おもちゃ遊び・絵本を使った遊び（土曜日）
12	三重大学医学部附属病院小児病棟医学部学生ボランティア（大学生）	入院児	･「すいようプレイタイム」（全ての入院患児とその家族:紙芝居や音楽，料理，工作，お絵かき，墨遊びやゲーム，季節の遊び，おいしゃさんごっごなど），「ちびっこプレイタイム」（乳幼児とその家族：歌遊び，リズム遊び，ボールプール遊び，大きな紙へのなぐり描き，おままごとなど),「夜のぷれいタイム」（就学児童･思春期児童:ゲーム大会，プレイタイムの準備，おしゃべり），「母のプレイタイム」（付き添う母親:ヨガ教室やマッサージ），「お誕生日お祝い隊」（主治医と一緒に着ぐるみを着てベッドサイドにカード），特別イベント（バーベキュー，花火大会，夏祭り，運動会，病院内社会見学，ハロウィンスタンプラリー，クリスマス会，病棟スタッフと結成したバンドでの演奏会，りんご狩り）
13	千葉県こども病院血液腫瘍科病棟ボランティア（一般）	入院児 家族	・遊ぶ活動（週1回），昼食介助，季節ごとのお楽しみ会，プレールームのおもちゃの整理，病棟内の飾りつけ，面会の親たちとのふれあい
14	大阪市立大学医学部学生ボランティア（大学生）	入院児	・ベッドサイドボランティア活動（不定期・継続的）
15	大阪市立大学附属病院A：医学部学生ベッドサイドボランティア（大学生），B：看護短大ボランティア（大学生），C：「夏休み☆こども祭り」ボランティア･チーム(大学生)，D:アートプロジェクトサポート・ボランティア活動（大学生・一般：美術関係者･見学者・記者・患者の保護者）	入院児 家族	A：ベッドサイドボランティア活動，季節のイベント活動，B：集団遊び，C：祭りの企画，実施・運営，D:ワークショッププログラムの実施，ワークショップまでの制作，カーテンの掛け替え，写真の現像，展覧会の設営・案内係，コンサート（クリスマス・ガムラン・ピアノなど），ワークショップ（「音と映像のワークショップ（音楽回診）」「美術ワークショップ」），院内展覧会
16	A：「メイク・ア・ウィッシュオブジャパン」，B：「NPO法人キッズエナジー」，C:日本動物病院福祉協会，D:「日本グッド･トイ委員会」（以上一般）	入院児 家族	A：難病の子どもたちの夢をかなえる活動，B：相談事業，病院・施設へのボランティア派遣など，C：CAPP訪問活動，D：小児病棟への遊びのボランティア（おもちゃコンサルタント）派遣事業
17	大阪府立母子総合医療センター学生ボランティア（大学生）	入院児	・遊び

2) 北里大学「ぬいぐるみ病院部」(文献 2)

大学生の「ぬいぐるみ病院部」は，入院児を対象として Child Doctor Hospital（CDH）活動を展開している．CDH の活動によって，子どもたちは，「医療を怖い対象ではなく，自分にとっての味方であるという認識がもてる．実際の医療器具に触れることで医療に対する親しみを感じられる．入院中は受け身になりがちな子どもたちが，医療に主体的にかかわることができる．子どもたちが楽しい時間を過ごせる．」(② p.406.）とその目的が述べられている．CDH では，まず，子どもが真っ白で無地のキワニスドールという人形に洋服や顔を描き，名前をつける．その後，キワニスドールとともに保護者役の学生が医師役となった子どもの元へ受診に訪れ，医師役である入院児がドールを診療していく．そして，治療後のキワニスドールは，子どもの入院生活のパートナーになるという流れで活動が行われる．

骨折で入院していた入院児の CDH におけるエピソードが，以下のように紹介されている．「『タロウちゃん（キワニスドールの名前）は骨が折れてるみたいですね』『バイキンがくっつかないようにちっくんしましょう』まるでじぶんが体験している『入院』の意味を自ら整理するかのように診療が進んでいきます」(② p.406.）．また，CDH を実施した子どもの反応について，保護者は，「『人形はどうして病院に来たんだろうね？』の問いに『頭が痛いんだって』と答えた我が子．自分の病気と同じことを言うとは正直驚きました．人形に貼っていたガーゼを『長く貼っているとかゆくなるから，そろそろ剥がしてあげるんだ』と自分の身に起きていることと重ねて考えていました．」とコメントを寄せている．

上述の報告からは，入院児が遊びをとおして医療に親しむことで，治療への不安を緩和させ，療養生活に主体的に向き合う気持ちをもった様子がうかがえる．

3) 神奈川県立こども医療センター「オレンジクラブ」大学生の「チャイルドウィッシュ」「リラの家」(文献 5)

神奈川県立子ども医療センターでは，「オレンジクラブ」，「チャイルドウィッシュ」「リラの家」が，「病棟の外で待っているきょうだいのお子さんたちにとって，病院にいる時間がほんの少しでも楽しいものになり，それによってご家族に少しでも安心してほしい．」(⑤ p.1332.）などの思いから，入院児の兄弟姉妹を預かる活動を行っている．「オレンジクラブ」が水曜 10 時半から 16 時，「チャイルドウィッシュ」第 2・4 土曜と毎週日曜の午後，「リラの家」が月・火・木・金曜の 9 時から 15 時までと，3 団体で協力して一週間をカバーしている．

ボランティアは，活動時の兄弟姉妹の様子を，「活動中に聞こえてくる，入院しているきょうだいの話や，心にたまった寂しい思いを聞いたり，おもちゃを独り占めにしている姿をみたりすると，きょうだいたちにとっても感情表出の場所として，少しではあるが役に立てているように思う．」(⑤ p.1332.），「自分中心に遊んでもらえることがうれしいらしく，緊張していた表情も次第にほぐれ，楽しさいっぱいになり，ハイテンションで元気があふれすぎることがある」(⑤ p.1332.）と報告している．

上述の報告からは，保護者の面会中，ボランティアが遊び相手や話し相手になることで，入院児の兄弟姉妹が，自身の気持ちを発散させ，寂しさを緩和させた様子がうかがえる．

4) 聖路加看護大学「ナイトフレンド」(文献 9)

聖路加看護大学附属病院では，大学生の「ナイトフレンド」が，「きょうだいや患児の頑張りを認め，孤独の軽減とストレス緩和をはかる．保護者面会中のきょうだいの安全と保護者の安心を確保し，良質な面会時間を提供する．」(⑨ p.1845.）ことを目的とし，平日の夕方，保護者が入院児と面会している間，入院児の兄弟姉妹と遊ぶ活動を行っている．

入院児の保護者から，「核家族化が進む中，きょうだいがいる子どもが入院した場合，残りのきょうだいの面倒をどうするかということは，深刻な問題たと思います．このような活動の需要はこれからもますます大きくなっていくものと思います」「ナイトフレンドの皆様のおかげで入院生活を無事乗り切ることができました」(⑨ p.1849.）などの声が寄せられている．

上述の報告からは，入院児に面会中，ボランティアが兄弟姉妹を預かることで，保護者の負担が軽減した様子がうかがえる．

5) 三重大学医学部附属病院小児病棟の医学部学生ボランティア（文献 12）

三重大学医学部附属病院小児病棟では，大学生が，「入院児とその家族を対象とした遊びの時間『プレイタイム』」(⑫ p.165.）を実施している．

「プレイタイム」は対象者に即して数種類用意されているが，乳幼児とその家族を対象としたものに，「ちびっこプレイタイム」がある．「ちびっこプレイタイム」は，歌遊び，リズム遊び，ボールプール遊び，なぐり描き，おままごとなどが行われ，毎月末には，子ども達の手形をとる企画も設けられている．ボランティアは，このプレイタイムに参加した入院児（幼児）について，「入院当初から病院内の全てに恐怖心や懐疑心をもってしま」(⑫ p.167.）い，活動参加時も「学生ボランティアに対して当初，笑顔を見せたり，おしゃべりする様子はなかったが，次第にだっこされたり膝の上でゴロゴロして笑顔を見せたり，リラックスす

る様子が見られるようになった」(⑫ p.166.)，「病院の全てに対して頑なに心を閉ざしていたAちゃんが，母親に『病院って楽しいな』と話すまでになった」(⑫ p.167.) と報告している．

就学児や思春期の子どもを対象としたものに，「夜のプレイタイム」がある．「夜のプレイタイム」では，ゲームを用いたゲーム大会や，プレイタイムの準備の手伝い，気軽におしゃべりをする時間などが設けられている．病棟スタッフらとの合同演奏会の時は，演奏や歌の練習を行うこともある．このプレイタイムに参加した入院児（児童）について，「遊びの活動に参加することによって，入院生活の中で楽しみを見出すようになり，受身の遊びのスタイルから自発的なスタイルへ自然に移行していった．また，小学校入学後から，他の患児らも巻き込んで遊びを発展させていった．病院フロアでの演奏会を提案した際，Bちゃんはダンスで参加したいと，積極的に自分の考えを述べた．彼女の積極性に触発され，参加メンバーは，患児と母親たち，医師，看護師，薬剤師，検査技師，学生ボランティアと広がっていった．」(⑫ p.167.) と報告されている．さらに，「遊びの活動の中でリーダーシップをとって周囲の人々を巻き込んで行ったBちゃんは，退院後も地元の友達と良好な関係を築いており，入院中に経験した遊びの経験をもとに学校行事の時に立候補や提案を行うなど，学校生活にも積極的に参加している．」(⑫ p.168.) と退院後の様子も報告されている．

また，中学生の入院児について，「料理のプログラムの時は必ず参加して，ボランティアを手伝った．そして，病室から出られなかった患児らの分を作って，病室とプレイルームを何度も往復していた．C君は，自分の入院経験を通じて，入院生活における患児らの遊びや楽しいことの必要性を何度も話していた．そして，自分の誕生日の時に『お祝い隊』が来た時の感動を通じて，『小さな患児だけでなく，思春期の患児も参加できるプレイタイムが欲しい』」(⑫ p.168.) と，「夜のプレイタイム」を発案したと報告されている．さらに，入院児の退院後について，「退院後も定期的に病棟の友人たちの見舞いに訪れてプレイタイムの活動を手伝い，将来は小児病棟のボランティアグループに入りたいと希望している．」(⑫ p.168.) と報告されている．

上述の報告からは，幼児期の入院児は，ボランティアとの遊びをとおして療養生活への不安を軽減させることができ，学齢期の入院児は，多様な人々と多様な活動を経験することで，社会性を養い，療養中や退院後の生活に前向な姿勢をもてた様子がうかがえる．

6）大阪市立大学医学部学生ボランティア（文献 14）

大阪大学医学部小児病棟では，大学生が，「単発のイベントや遊びを目的とせず，地域で子ども達と関わる『近所のおにいちゃん，おねぇちゃん』のように，病院に隣接する医学部学舎から授業や実習の合間に継続的・日常的にふらりと遊びにくる，というスタイル」(⑭ pp.42-43.) で，「継続的且つ日常的な存在として子供との信頼関係を構築する」(⑭ pp.42-43.) ことを目的とした「ベッドサイドボランティア活動」を行っている．

この活動の対象となった入院児やその保護者に，「ボランティアと一緒の時，どんなことを考えてた？」と質問すると，本人は「いやな時間が無かった，一人でおるよりかは全然いい．心の支えになっとったかな．色々と心配してくれた．来たときにどんな感じやーって，現実的なこと．親やったら言ってもわからんし，がやがや言って鬱陶しかった．学校の友達，地元の連れに近い感じかな……．」，「……わかってくれるっていうのがあるから相談できる感じ，同級生より年上の意見が聞きたいような（時に，一緒にいてくれていた）．病院の方と患者の方というのがあって，患者の方にはいってきてくれる感じかな．同じ患者さんの中にちょっと上のお兄ちゃんがおったみたいな．学校はどっちにつくかわからへん．」(⑭ p.45.) と答えた．また，母親は「治療の励みになってたと思う，病院の『日常』とはちがった新鮮な風を外から吹き込んでくれた．友だちよりももっと親密な本音の付き合いができた関係だった．看護婦さんや先生とは違って，弱みも見せられていたし，病気になったけど，ボランティアに出会えたし，いやなことばかりじゃなかったって言ってました．」(⑭ p.45.) など，と答えたことが報告されている．

上述の報告からは，入院児がボランティアと信頼関係を結ぶことで，不安を軽減し，療養生活に前向きな姿勢をもてた様子がうかがえる．

7）大阪市立大学附属病院ボランティア（文献 15）

大阪市立大学附属病院では，療養環境改善活動の一環として，「アートプロジェクト」を行っている．このプロジェクトは，「原疾患や治療の副作用で免疫力が低下して，病棟外の人が多く集まる場所へ出かけて行くことができない入院中の子ども達のために，プロのアーティストに病棟での開催を依頼したことに始まっ」(⑮ p.123.) たものである．一般にイメージされやすいコンサートなどの慰問活動とは異なり，「子ども達とアーティスト達が双方向に影響し交流し合って，何らかの新しい創造を互いにもたらすことができるような表現活動の場」(⑮ p.123-124.) をめざしている．

「アートプロジェクト」では，コンサート（クリスマス・ガムラン・ピアノなど），ワークショップ（「音と映像のワークショップ（音楽回診）」「美術ワーク

ショップ」），院内展覧会などを行っている．なかでも，「美術ワークショップ」では，子どもたちが撮影した空の写真を用いる「そちらの空は，どんな空？とおい，お空のこうかんにっき」，病室のカーテンを2週間ごとに掛け替える「ようこそ！マイルームへ！スイッチ！ザ・カーテン．オープン！ザ・ウィンドウ」，病院内でカルテや血液，尿などの検体を無人搬送するために使用する「自走台車」という箱形の移動装置に子どもたちが絵を描く「はこぶね，はこぶね」などユニークな取り組みが行われている．

このプロジェクトには，音楽家や美術家，建築家やアート・マネージャー，ワークショップ・プランナーなど様々な専門分野をもつ人々が個別，もしくはチームを組んで参加しており，医学・看護・福祉・保育関係の大学生，退院した高校生以上の患者，保護者，アーティストの知人（美術関係者・美大学生を含む），アートNPOのボランティアも活動を支えるサポート・ボランティアとして参加している．さらに，取材に訪れた記者や，見学に訪れた大学院生や美術関係者も取材のついでにサポート・ボランティアとして参加する場合が多かったと報告されている．

「美術ワークショップ」に参加した入院児（小学生）が，共同制作の中で元患者であるボランティアと以下のような会話を交わしたことが報告されている．「Aちゃん『あんなぁ，お医者さんになるのが夢．』私（＊ボランティア）『へ～すごいな～．じゃあ，いっぱい勉強しなあかんなぁ．』Aちゃん『もうしてる．検査（採血）のときとか，じ～っとみたり．いろいろ見てるねん．』私『そうやなぁ．入院しててもいろんなこと勉強になるなぁ』Aちゃん『うん．そうやねん．』」（⑮ p.126.）．プロジェクトの実施者は，入院児が，ボランティアと闘病体験を共有する中で，「決して辛くないはずはない入院生活の体験（採血のための注射）を受け止め，自分自身の将来の夢に結びつけて語ることが出来ている．女児は自己物語を語ることを通じて，自己像を確立しているともいえる．」（⑮ p.129.）と分析している．

また，プロジェクトに参加した保護者は，「患者さんや家族には，“いい人”でなければいけないっていう思いこみがあるんです．だって，狭い場所で一緒に暮らさなければならないこそから，できるだけ巧く人間関係をしたい．それがつらい．病気や家族のことや将来のこととか色々考えることがあって，いっぱいいっぱいなのに，それ以上に，そんなこと考えなくてはならないと．“いい人”として医療者からよい治療も受けたいし，病気も治したいし，居心地よく暮らしていきたいし．・・・でも負担．だからそんなことを考えないで発散できる，リラックスできるところは，必要だと思う．入院の体験があったら（アート活動のような場が）どんなに大切かわかる」（⑭ p.132.）という声を寄せている．プロジェクトの企画者は，「病院組織全体を巻き込んだ形で展開する協同的実践（参加した人々同士が成果や思いを共有しやすい活動形態）としてのアートプログラムと，一定の文脈にとらわれないアーティストと子ども達の自由な表現・創造を，安全面から安定して支援する病院側のシステム」（⑭ p.135.）が，保護者に「現実を別の視点で見ることを勧め，世界に対する新しい意味の生成を促し」（⑭ p.135.）たと分析している．

上述の報告からは，入院児やその家族が，多様な人々との多様な経験をとおして社会関係を構築し，療養生活に前向きに向き合えるようになった様子がうかがえる．

III. 病院ボランティアによる入院児の支援の特徴

ここでは，前章で整理した小児医療における病院ボランティア活動の実態について，対象者，実施者の観点から分析し，病院ボランティアによる入院児の支援の特徴について考察する．

1. 活動の対象者

小児医療における病院ボランティア活動は，入院児のみならず，家族（保護者・兄弟姉妹）をも対象としていた．以下に，対象者の心理社会的問題を踏まえて，病院ボランティアによる支援について考察する．

1）入院児

A. 就学前

武田（2012）は，病気の子どもの心理社会的問題を発達段階別に示しているが，幼児期の子どもの特徴について，入院し家庭を離れることによって分離不安，情緒不安を示しやすくなる．また，治療や入院に伴う苦痛体験やその過程で感じるさまざまな不安や遊びの欠如などからストレスをためやすく，時には退行行動が見られたり，睡眠や食事などに異常を示したりすることがあると述べている[9]．

就学前の入院児について，前述した病院ボランティアの活動では，治療が生活のほとんどを占める入院生活に対して抱く恐怖や不安を，遊びをとおして緩和させ，療養生活に前向きな気持ちを抱かせることができていた（文献3・12）．

以上のことから，病院ボランティアによる支援は，治療や入院に伴う不安や遊びの欠如を原因とするストレスを緩和させることに貢献しており，幼児期の入院児の心理社会的課題の解決を促すものであったと考えられる．

B. 学齢期

病気の子どもが抱える児童期の心理社会的問題について，武田（2012）は，入院や治療のため学校を欠席しがちとなると，学習に遅れが出たり，クラス内で孤立しがちになり，仲間からとり残されるといった恐怖感や不安感が高まる．また，長期間にわたり入院する場合，病院という隔離された環境から，経験不足に陥ったり，仲間関係や社会適応の構築が未発達になることもあると述べている．また，思春期については，この時期に慢性疾患をもつことは，学業の遅れや欠席などの学校生活上の問題や副作用への不安，ボディ・イメージに関する劣等感，病気の予後や自分の将来についての不安を抱くようになり，複雑な心理社会的問題を抱えるようになると述べている[10]．

前述した病院ボランティアの活動において，学齢期の入院児は，遊びや行事などをとおして多様な人々と多様な経験を重ねることで，社会性を養い，将来の生活に前向きな見通しをもつことができていた（文献12・15）．また，学生ボランティアが受容的に話を聞く中で，安心感を抱き，自分の将来について理想像を描くことができていた（文献14）．

以上のことから，病院ボランティアによる支援は，児童期の経験不足を補い，仲間関係や社会適応の構築を促し，思春期の病気の予後や自ら将来についての不安を緩和させることに貢献しており，学齢期の入院児が抱える心理社会的課題の解決を促すものであったと考えられる．

2）家族

A. 保護者

駒松（2009）は，病気の子どもをもつ保護者の心理社会的問題について，障害や慢性疾患をもつ子どもの保護者（特に母親）はやむ子どもや兄弟姉妹の発育過程に応じて，さまざまな問題に直面している．さらにその問題や不安を相談する場がなくて苦慮している．母親が心理的に不安定であると子どもに悪影響である．母親への支援は子どもの健やかな成長に不可欠であると述べている[11]．

前述した病院ボランティアの活動において，保護者は，子どもと共に遊びや行事などに参加することでストレスを緩和し，同じ境遇の保護者との情報交換を可能にしていた（文献1・15）．また，病院ボランティアが入院児の兄弟姉妹を預かる活動を提供することで，保護者は入院児とともに安心して療養生活に向き合うことができていた（文献9）．

以上のことから，病院ボランティアによる支援は，療養生活に関する保護者の負担や不安を軽減することに貢献しており，入院児の保護者が抱える心理社会的問題の解決を促すものであったと考えられる．

B. 兄弟姉妹

駒松（2009）は，入院児の家族に慢性疾患や障害をもつ子どもがいる場合，保護者の関心はそれらの子どもに集中するため，兄弟姉妹は寂しさを体験していると兄弟姉妹の心理社会的課題を挙げている[12]．

前述した病院ボランティアの活動において，入院児の兄弟姉妹を預かる活動を提供することで，兄弟姉妹の寂しさを緩和することができていた（文献5）．

以上のことから，病院ボランティアによる支援は，兄弟姉妹の寂しさに寄り添うことに貢献しており，入院児の兄弟姉妹が抱える心理社会的課題の解決を促すものであったと考えられる．

2. 活動の実施者

小児医療における病院ボランティア活動は，一般，大学生，高校生によって行われていた．以下に，実施者の特徴を踏まえて，入院児の支援について考察する．

1）ボランティアであること

国立成育医療センターにおける「ひまわり」の活動（文献4）について，活動実施者は「ボランティアは，医療従事者や教育の専門家とは，あくまで立場が異なる．やってくる子をあるがままに受け入れ，笑顔でいられるように常にそばで見守り，包んであげればよい」（④p.1337.）と述べている．また，大阪市立大学医学部附属病院における医学部学生ボランティアの活動（文献14）について，報告者は「子ども達は，ボランティアと医療従事者・保護者・院内教師とは異なった文脈で信頼関係を築いていたのであり，その文脈とは『病人でない本当の自分を，対等にみてくれる人』『病院の外からやってくる人』であった．」（⑭p.47.）と分析している．

京都大学附属病院小児科のボランティアグループ「にこにこトマト」（文献1）の代表者は，自身の子どもの長期入院の経験を，「子どもにとっては日常の一部だった『遊び』が，入院を堺にパタリとなくなっていました．看護師さんが遊びの時間を設けてくださっていましたが，多忙のためにキャンセルされることもたびたびあって，子どもはそのたびに落胆してしまう．だからといって，看病と家のことで手いっぱいの私に子どもと遊んであげる余裕はなくて．」（①P.76.）と振り返り，このことがボランティア活動開始の契機となったと述べている．また，聖路加看護大学「ナイトフレンド」の活動（文献9）も，「病棟の師長と話していると，『病棟は，12歳以下の面会制限を設けており，子連れで面会に来ても，ロビーに放置しなければならず，事故の危険性がある』という問題を，病棟が抱えている」が，「看護師もそれらの実情を把握してはいるものの，業務で手が回らない」ことがわかり，「特

に，夕方以降，就寝までの時間は，保育園や学校帰りのきょうだいが一人きりで，ロビーで待つこともしばしばある」（⑨p.1846.）という問題を把握したことを契機に始まったと報告されている．

以上のことから，病院ボランティアは，自らが病院における専門職ではないことを自覚した上で，この独自の立場を活かして活動していることがうかがえた．そして，入院児やその家族のための「遊び」の提供や「付き添い」など，家族にも専門職にも手の届かない支援を実現させ，独自の役割を果たしていると考えられる．

2）病院外の専門家や病院における専門家の研修生が関わっていること

長野県立子ども病院の病院祭（文献6）では，熱気球グループ，動物介在活動グループ，ケアクラウン協会が関わることで，入院児や家族に，日常経験できない世界を提供していた．また，大阪市立大学附属病院で行われた「アートプロジェクト」（文献15）には，音楽家や美術家，建築家やアート・マネージャー，ワークショップ・プランナーなど様々な専門分野をもつ人々が専門家として，また，アーティストの知人（美術関係者・美大学生を含む），アートNPOのボランティアなどがボランティアとして活動に参加していた．このことで，本物の芸術表現の世界が病院で展開され，入院児や家族に通常病院では経験できないような体験が実現し，多様な人々の相互作用が生まれていた．

北里大学「ぬいぐるみ病院部」の活動（文献2）では，看護を学ぶ学生が関わることで，CDH活動が展開され，入院児は治療に親しみを感じることができていた．また，大阪市立大学附属病院における医学部学生ボランティア（文献14）は，ボランティア入部の条件として「医師・看護師による研修や先輩学生ボランティアが同行して行うトレーニングを義務づけ」，「幹部学生は医師・看護師とスタッフミーティング（月1回）を行って，活動の監督・指導を受ける」（⑭p.43.）ことで，入院児の心に寄り添うケアができていた．

以上のことから，病院ボランティアに病院以外の専門家が関わることで，入院児やその家族が，病院内において「季節の行事」，「絵画・造形活動」，「鑑賞会」に参加する機会が実現し，多様な人々との多様な経験をとおして社会関係を構築することができたと考えられる．また，病院の専門家の研修生が関わることで，病院の専門職と連携した入院児の心のケアが実現したと考えられる．

3）学生が多く参加していること

三重大学医学部小児病棟の活動（文献12）では，入院児が将来小児病棟のボランティアグループに入りたいと将来のイメージを描いたり，大阪市立大学附属病院における医学部学生ボランティアの活動では（文献14），入院児がボランティアに信頼を寄せる様子が報告されていた．活動報告者は，「『病院で笑ってもええんやな』とある子どもが言った言葉に象徴されるように，医療以外のことを気軽に話しができる人の存在は必要不可欠だろう．」（⑫p.169.）と分析し，「中高生の患児らは進路や就職，恋愛の悩みなどを，年の近い大学生ボランティアに相談することも多く，彼らの姿を通じて自分の近い将来を描くことができた．」（⑫p.169）と入院児の姿を報告している．

以上のことから，病院ボランティアに学生が多く関わり「遊び」を提供し「付き添い」を行うことで，入院児は，仲間関係を構築し将来のイメージを描くことができたと考えられる．

おわりに

本稿では，小児医療における病院ボランティアの活動報告17件を分析し，病院ボランティアが入院児にどのような支援を行ってきたのかを考察した．

一般，大学生，高校生から構成される病院ボランティアは，入院児とその家族を対象として，遊び，季節の行事，絵画・造形活動，付き添い，鑑賞会など，多様な活動を展開していることが明らかになった．その活動内容は，ボランティアという病院における独自の立場と各々の背景や特性を活かして，保護者や専門職の手の届かない領域にアプローチし，入院児やその家族に楽しさや安心，病院外の日常の風を届けるものであった．入院児やその家族は，多様な人々との多様な経験をとおして，不安を軽減し，社会関係を構築し，療養中や退院後の生活に前向きな姿勢をもつことができていた．

今回分析した活動は，数多く行われている病院ボランティア活動の代表例にすぎない．また，病院ボランティアによる入院児の支援の特徴は，各施設の入院児の実態，療養環境の状況，ボランティアの背景や特性などによって大きく変わってくると考えられる．今後は，一地域や施設における活動を調査し，病院ボランティアが入院児の支援をどのように担っていくことができるのかを詳細に分析したいと考えている．その上で，地域の教育資源の活用による病院内教育の充実について検討したい．

注および引用

1) 文部科学省（2009）『特別支援学校学習指導要領解説総則等編（幼稚部・小学部・中学部）』教育出版, pp. 238-241.

2) 土屋忠之・武田鉄郎（2011）「病院内教育における小児がんや慢性疾患の児童生徒に対する『体験的な活動を伴う学習』に関する研究」『特殊教育学研究』49（1）, pp. 51-59.

3) 横田雅史監修（2004）『病弱教育 Q & APART Ⅳ－院内学級編－』ジアース教育新社, p. 166.

4) 米山雅子・野中淳子・高橋恭子・和田久美子・山崎美貴子（2012）「日本における小児医療ボランティア活動の実態－小児がんの子どもが入院する施設に焦点を当てて－」『神奈川県立保健福祉大学誌』9（1）, pp. 71-78.

5) 伊藤良子（2009）「入院児に付き添う家族の入院環境に対する満足度－質問紙による調査から－」『日本小児看護学会誌』18（1）, pp. 24-30.

6) 岡敏明・鶴澤正仁（2005）「国内小児がん治療施設での教育と保育の現状と課題」『小児がん』42（2）, pp. 212-215.

7) 松尾ひとみ・原知子（2004）「小児医療におけるボランティア活動状況：文献検討をとおして」『福岡県立大学看護学部紀要』2, pp. 1-9.

8) 京都大学附属病院小児科ボランティアグループにこにこトマト（2012）「小児病棟に咲く笑顔」『月刊福祉』95（2）, pp. 76-79. ほか 16 件.

9) 武田鉄郎（2011）「病気, 障害の子どもの心理的特性」小野次郎ほか編『特別支援教育に生かす病弱児の生理・病理・心理』ミネルヴァ書房, p. 208.

10) 同前書, pp. 208-209.

11) 駒松仁子（2009）「子どもの理解を深める」『病気病弱教育・医療ソーシャルワーク・心理臨床を学ぶ人に』ナカニシヤ出版, p. 37.

12) 同前書, p. 37.